

3 地元企業×市民のタッグで 持続的な町おこし活動を

繊維の町として歴史ある岸和田では、綿花栽培による地域振興活動が盛んだ。はじまりは1996年。「綿花栽培を軸に町おこしを」と、木村元廣氏を中心に市民が「きしわたの会」を発足し、綿花栽培を開始。その綿を大正紡績株式会社に紡糸を依頼し、辰巳織布株式会社など地元企業の協力を得て織布や靴下、Tシャツなど綿製品の製造にも取り組んだ。そして2004年には、活動に共感した辰巳織布の会長・辰巳美績氏ほか地元企業が集まり「夢つむぎ会」を設立。「きしわた木綿物語プロジェクト」という名称のもと企業と市民が共同で、綿製品の製造・販売フェアやシンポジウムなどを開催している。辰巳氏は「地域振興活動を企業と市民が一緒に行うのは全国的にも珍しいこと。うまく連携を取りながら、今後も持続的に活動していきたいですね」と語った。

きしわた木綿物語プロジェクト「夢つむぎ会」事務局
辰巳織布株式会社内

岸和田市上松町273
TEL_072-427-4801
http://www.kishiwata.jp/



4 流体攪拌のグローバルブランドを目指して

さまざまなものづくりにおいて「攪拌」のプロセスは欠かせない。中でも流体向けの高速攪拌機を得意とする、96年に発売した「フィルミックス」では新しい概念の羽根を採用し、ナノサイズの粒径を均一に分散、微粉化させることを可能にした。リチウムイオン電池のスラリー（活物質粒子を溶液に混ぜた流動体）製造用としても使われ輸出も増やしている。社員による改善活動「困難でいいんかい活動」、タケカワユキヒデさんの作曲による社歌づくり、1組5人でマヨネーズの出来栄を競い合う優勝賞金100万円の「攪拌マイスター選手権」の開催など社員の愛社心、やる気を引き出す活動にも積極的。こういった独自の技術や取り組みが評価され「関西経営品質賞」も受賞している。蝶ネクタイ姿がトレードマークの古市尚社長は「会社への愛着が業務へのやりがいを生み、顧客満足を生みだす」との信念で「PRIMIX」を世界ブランドに育てていこうとしている。



プライミクス株式会社
大阪市福島区海老江8-16-43
TEL_06-6458-7531
http://www.primix.jp/

5 “未来の担い手”に託すモノづくりへの情熱



株式会社大阪工作所
東大阪市野南1-34
TEL_072-962-1515
http://www.osaka-kousaku.co.jp/

大阪では数少ない川崎重工業航空宇宙カンパニー認定工場として、航空機のドア金具や機体を支える梁などを製造する大阪工作所。工場には高度なプログラミングを必要とする最新鋭の機械が並ぶなか、半世紀前の手で操作する機械も置かれている。「かつては、人間の感覚で数ミクロン単位の品質を実現した。ものづくりの根本を、こうした機械で若い人にも伝えていかなければ」と高田克己会長。布施北高校のデュアルシステム実習も積極的に受け入れ、半年や1年単位で計画を立て、工場での作業体験や、名刺を持って社員の営業先に同行させるなど社を挙げて高校生を育てる。実習風景は毎日写真に収め、終了時にアルバムにして渡す。「いつか、彼らの中から東大阪のものづくりの担い手が出てきてくれたら」と期待を寄せる。

6 炭再生紙で循環型社会を実現



山陽製紙株式会社
泉南市男里6-4-25
TEL_072-482-7201
http://www.sanyo-paper.co.jp/

炭再生紙で循環型社会を実現

古紙を再生し、包装・製袋用クレープ紙などを製造する山陽製紙。梅の種やビールかすなどを炭化させて紙にすきこむ、炭再生紙事業を進めている。「9年前、梅の産地・和歌山県みなべ町から出る梅の種を炭にして、紙にすきこめないか相談を受けたのがきっかけです。炭をいかに紙に定着させるか試行錯誤しました」と原田六次郎社長。紙にすきこむベストな炭の形状と割合をつかむまで4年の月日を費やし、独自の製法を確立した。消臭や調湿といった炭の機能と、自由に加工できる紙の特性をもち合わせた炭再生紙は、靴の消臭脱湿シートやスーツカバーなどに使われている。「今まで捨てられていたものが紙として生まれ変わる。紙づくりを通じて循環型社会の実現に貢献できれば」。同社が掲げる理念は高い。

7 産学公の連携も、 継続こそがチカラになる!

枚方地域を中心に産学公が一体となって、地域中小企業の技術力アップや新事業へのチャレンジをサポートする活動を行っている『ひらかた地域産業クラスター研究会』。1カ月に1回のペースで活動を行いながら多数の産学公連携実績を誇っている。実績に結びつく活動の秘訣をうかがうと「究極の目標は中小企業が自社製品を開発する技術力を養うことですが、すぐに成果を求めているは長続きしません。まずは産学公がそれぞれの役割を果たし、継続的に活動することを目指す中で、多くの成果が生まれてきました」と、会長の佐々木啓益氏。また、中小企業がいきなり単独で大学や公的機関を活用するのはハードルが高いとされるが、佐々木会長は「クラスター活動を通じて構築した人脈がそのハードルを下げられる」と語る。情報発信にも力を注ぐという今後の活動から目が離せない。

ひらかた地域産業クラスター研究会
枚方市車塚1-1-1 輝きプラザから6F
TEL_050-7105-8077
http://tsuda-science.jp/kurasuta.html



大阪府下のワイヤーロープ事業所の全国シェアは約35%を誇る。なかでも極細鋼線に特化した和泉市の大阪コートロープ社に、NHKから電話が入ったのは昨年冬のことだ。「中小企業を舞台にしたドラマ“タイトロープの女”のロケ地に、そちらの工場をお借りしたい」。電話を受けた加納川快明社長は社員への負担を考えたが、現場から協力の申し出もあり、約2ヵ月間のロケが始まった。社員が役者に機械の扱い方を教え、加納川氏は編集作業にまで立ち会い専門用語や技術に関して助言した。2月に放映を終え、「自分たちの技術が客観視できましたね。ドラマにはわが社が開発した9ミクロンの超極細鋼線の製造技術も取り入れられ、社員のモチベーションもぐっと上がりました」と加納川氏。同社は、いま、7ミクロンの世界に挑戦している。



大阪コートロープ株式会社
和泉市テクノステージ3-5-22
TEL_0725-51-1501
http://www.ocr.co.jp/